

この夏も国内福祉研修を利用して、秋田県藤里町に訪問をしてきた。高齢者ボランティアサークルの活動・個人的な訪問も含め5回目となる今回の訪問での私の個人的な目標は、「もっと深く藤里町と関わること」であった。大学1年生で初めて藤里町を訪れてから、毎回来るたびにさまざまなことを学び、多くの気づきを得てきた。そして4年生になった今年は、今まで得てきたことを統括し、考えや気づきを自分なりにまとめられたらという思いを胸に研修に臨んだ。

今回の研修の内容では、毎回行っている高齢者施設や独居高齢者のお宅訪問などに加えて新たに“勉強会”を行っていただいた。この勉強会は、藤里町社会福祉協議会の職員の方からの提案で、「より藤里町のことを知ってほしい」ということから、職員の方が直々に藤里町社会福祉協議会の活動や行っている事業についてのお話を聞かせていただいた。藤里町への毎年訪問は行っているが、このように社会福祉協議会のほうからお話をいただいて勉強会をさせていただいたのは今回が初めてのことであったので、自分たちが一つの地域でそのようにしていただけるようになるまでの関係性を築けたこと、また大学での座学では学べない貴重な話をたくさんしていただけたことに大きな喜びを感じた。勉強会では、高齢化率が全国1位の秋田県の中でも藤里町は2位(42%)であり、その著しい高齢化社会の中で高齢者がいかに安心して暮らすことが出来るまちづくりをするかということに焦点を当てた事業の数々を説明していただいた。また、近年高齢化に伴った過疎地域化からの引きこもり問題が深刻化していることを受け、そういった人たちへの支援や、就労事業などのお話も聞かせていただいた。勉強会を経て感じたことは、まず高齢者への支援について、福祉の現場の充実さ、そして地域への密着度である。さまざまな境遇や家族や性格を持った高齢者一人一人の生活に行き届くようなサポートを常に追求し、さまざまな事業を展開していくまちづくりは、さすが日本最先端の福祉だと感じた。行政がまちの中に自然と根付き、人々と信頼関係を築くことが、本当の意味での“安心して暮らせる”ことに繋がるのだということに改めて実感した。引きこもり支援については、職員の方も言っていたが現代に増えているとても難しい、しかし無視してはいけない大きな問題であると感じた。社会に馴染めず、行き場をなくし、家に引きこもってしまう人々とその家族を、どうやって支援し、問題解決に繋がられるか。その役割を社会福祉協議会が担い、家庭訪問や就労支援を行っていくことで、まちがどう変わっていくのか。まだ始まったばかりの事業だが、以前の訪問では藤里町の“こみっと”で社会復帰を目指す人々が行っている活動を見せていただいたことがある。長い時間をかけて、多くの方が社会で活躍していける可能性を探っていったら良いと感じた。

今回の研修での私が目標に掲げていた「もっと深く藤里町と関わる」ということについて、これを私は研修中に2つの視点に分けて自分なりに考えをまとめていくことにした。1つは「私自身と藤里町の人々」、そしてもう一つは「私たちサークルと藤里町」である。

まず、私自身と藤里町の人々との関わり合いについてである。毎回の訪問で交流させていただき高齢者クラブの方々や独居高齢者の方の中には私のことを覚えてくださり、毎度歓迎してくださる方がたくさんいる。その交流の中で私は毎回たくさんのお話を学び、たくさん元気をもらってきた。そういった人たちに私は何か出来ているのだろうといつも思っていた。今回の交流の中で、お話ししていた一人の方から、こういった言葉を聞いた。「私たちは本当に毎日同じ生活で、だんだん体も弱るし老いていく。だけど、あなたたちが毎回来てくれて、すごく元気をもらうのよ。また来るねって言うってくれるから、またそれまで元気でいなきゃって思うのよ。」これこそが、私のできる最大の恩返しであり、継続して訪問してきた意味とそのとき私は感じた。4年間をかけて、私は藤里町で単なる研修や地域福祉の勉強だけではない多くのことを学ぶことができた。それは人と人とのつながりであり、地域のあたたかさであり、関係を深めていくことの大切さである。年に1、2回ではあるが、それを楽しみに待っていてくれる人たちがいる。それは第二の故郷のようで、「また来たい」と何度でも思える。そういった気持ちに気づけたことが本当に嬉しく感じた。また今回の訪問で、前回訪問させていただき独居の方が最近亡くなったことを知った。とても悲しいことではあったが、訪問したときにその方が私たちのプレゼントした色紙を大切に飾ってくれたことを思い出した。限られた時間の中で、一瞬でも、そのときだけでもその方に寄り添い、楽しい時間を過ごし、元気をあげられることが出来たならそれで良かったのだと思うことが出来た。藤里町への訪問を経て私は、たくさんの人との出会いと交流、そのかけがえのないすべての一期一会の大切さを学ぶことが出来た。

次に2つ目の私たちサークルと藤里町との関わり合いについて、私たちの高齢者ボランティアサークルが藤里町への訪問を始めて今年で10年になる。最初は単なる雪かきボランティアだったようだが、今では社会福祉協議会の方の協力があり、毎年さまざまな新しい活動をさせていただいている。また、今回は地域の方々との食事会を開いていただき、高齢者だけではなく若い方や子どもたちとも交流させていただき、たくさんのお話を聞くことが出来た。社会福祉協議会の職員の方からのお話の中で、「こうやって大学生が定期的に訪問してくれて、活動に参加してくれたり質問してくれたりすることで、こちらもいろいろなことに気付いたりして良い刺激になるんですよ。」とおっしゃってくださっていた。このように、私たちの訪問が少しでも藤里町に影響を与えていけるような良い関係性を築いて来れたことは、やはり毎年継続してきたことが大きいだろう。地域を知るためには、そこに自分の足で入り、そこに住む人々と関わるのが最も重要だということを私は藤里町への訪問を重ねるたびに感じてきた。そしてこれからもこの素晴らしい活動を継続していくために、後輩たちに藤里町の魅力を伝えていくことが大切だと感じている。一人でも多くの後輩たちが藤里町の良さを知り、訪問し、たくさん学びを得てくれることが、私たちが藤里町に出来ることだと思っている。

今回の研修では、勉強会などを通じて前回よりも秋田県藤里町という一つの地域を客観的に考える良い機会となった。また、過疎地域における福祉のメリット・デメリットや、住民一人一人に合った支援をしていくことの難しさと社会福祉協議会の役割についても今一度考えることにも繋がった。また、ここへ来て今一度継続して訪問してきたことの意味とやりがいを感じられたことの喜びは大きかった。私たちが藤里町にたくさんのことを学ぶと同時に、私たちもほんの少しかもしれないが藤里町の力になれていることを実感することが出来た。高齢化が進み社会は変化していくが、それに適応していく藤里町社会福祉協議会のあり方は、都心部でも学ぶ部分は多いだろう。今回学んだことも含めて、藤里町への訪問で学んで培った自分なりの福祉感を、これからの大学の勉強や社会に出てからも生かしていきたい。そして、大学生活は残り少ないが、時間の許す限りで藤里町へ訪問し精一杯恩返し出来たらと思う。